



「折鶴のお守り」

岡山県立倉敷中央高等学校

「Aさんは鬱病だから」と職員さんから言われ、目の前の部屋に視線を向けると、カーテンを閉めた薄暗い部屋に暗い顔をしたAさんがポツンと座っていた。何か踏み込んではいけないような近づきがたい雰囲気にもまれていて、Aさんとの距離を取ろうとしている自分がいた。

その日の午後、AさんとBさんが塗り絵をしていたので、何を塗られているか尋ねると、すぐにBさんが答えられた。Bさんとの会話が盛り上がっていく中、ふと反対側を見ると、いつの間にかAさんの姿はなかった。急いでAさんの部屋へ向かうと、Aさんはベッドに腰かけ、カーテンの隙間から外の景色を眺めていた。「Aさん、Bさんとばかり話していてごめんなさい。今から私とお話しませんか」と言うとAさんは少し笑顔になって頷かれ、ぽつりぽつりと話し始めた。最初はご家族の話や育った地域の話をしてきたが、徐々に表情が暗くなり、「死にたい」「辛い」と呟くようになった。目に涙を浮かべながら呟く姿に、「何故こんな辛い気持ちになるのだろう」と私も心が苦しくなると同時に、何も出来ない悔しさで押しつぶされそうになった。何か私に出来ることはないのか、それを必死に考えた。結局、傾聴する事、声掛けを積極的に行う事、この二つしか今の私には出来ないと思った。残りの実習期間でそれを精一杯やろう。そう決意した。

次の日から、合間をぬってAさんに会いに行くようになった。最初は「またあんたかい」とぶっきらぼうに言われていたが、日が経つにつれて私を待って下さるようになった。「あんたが来るのを楽しみにしてる」と言われた時はとても嬉しかった。しかし、その後数日間、他の方への介助などでAさんと話す時間が減り、気になりつつもAさんの部屋に行けない日が続いた。久しぶりにAさんの部屋を訪ねた日、「あんたの名前を書いてくれないか」と小さな手帳を差し出された。名前を書いて渡すと、「ありがとう。お守りにするよ」と笑顔で言われた。

実習最終日の前日、いつものようにAさんの部屋へ行くと、Aさんに手招きをされた。傍へ行くと、折鶴を渡された。「こんなに話してくれたのは、あんたが初めてじゃ。何かお礼がしたかった」と言われた。その日の夜、私はAさんと同じように鶴を折り、心を込めて手紙を書き、最終日にAさんに感謝の気持ちを伝え、ずっと隣で塗っていた塗り絵と一緒に渡した。Aさんは涙を流されながら私の手を握り「幸せだった」と言われた。握られた手は力強く、とても温かかった。「死にたい」と言っていたAさんに私との関わりを楽しみにしていただけた事、幸せとと思っていただけで私にとっても幸せだった。Aさんは施設の出口まで見送って下さり、私が見えなくなるまでずっと手を振って下さった。

「鬱病だから」と、最初はAさんに対して一方的な先入観を抱いていたが、鬱病の方は決して独りでいたいわけではない。「死にたい」の中にはその方の心の叫びがある。私はAさんの心の叫びに気づき、寄り添うことが出来たからAさんの心の扉を開き、幸せを感じていただけただけなのだろうか。最初は涙を流されるAさんを私が笑顔で元気づけていたが、最後は涙が止まらない私をAさんが笑顔で送って下さった。病気や症状だけでその人を決めつけてはいけない。勇気を持って一步踏み出す事が心の扉を開ける鍵となる。

今回の実習で、改めて介護福祉士という仕事の奥深さと責任を感じる事ができた。介護の技術と共に、相手の心の思いに気付ける洞察力や寄り添い続ける真心を持った介護福祉士になりたいと強く思った。そのためにも、普段から人の事を決めつけた見方で見るのではなく、相手の本当の気持ちや、相手を尊重する姿勢を持つようにしたい。Aさんから貰った折鶴をお守りとして心の支えにし、私の理想とする介護を目指して歩んでいきたい。